

ホームズと近代の監視・管理社会 ——フーコー的読解の試み——

金子 幸 男

序

ホームズの探偵物語をどう読むか。最近、英文学のキャンオンには含まれない大衆文学が研究対象としてクローズアップされるようになった。推理小説というジャンルもその例外ではない。ケンブリッジ・コンパニオン・シリーズの中では、『犯罪小説』(Crime Fiction)と銘打ったイントロ的な論文集が出ている。スティーヴン・ナイト(Stephen Knight)の『犯罪小説 1800-2000 探偵・死・多様性』(Crime Fiction 1800-2000: Detection, Death, Diversity)は、探偵小説の歴史を扱った最新のものとして、大変すぐれている。日本でも、高山宏氏は『推理小説特殊講義』の中で、ホームズ物語をヴィクトリア朝の死の不安と倦怠を吹き飛ばすための死の祝祭装置であると論じている。また、富山太佳夫氏は『ホームズの世紀末』において、ドイルが書き落とした同時代の社会の出来事に注目しながら、ホームズを広く世紀末文化現象の一つとして、さまざまな文化事象と関連させて論じている。そこではヴィクトリア朝の住居、性の言説、女性旅行家、スポーツ文化、ジプシー、イングランドの田園、大英帝国、スピリチュアリズムなどの多彩な話題が、ドイルの作品や人生と関係づけられ、いわば万華鏡の世界が現出している。

具体的にホームズがどのように読まれているか、その例をケンブリッジ・コンパニオン・シリーズの『犯罪小説』という論文集の中から拾ってみよう。この本の短編推理小説を扱った論の中で、ホームズは次のように紹介されている。

Doyle expertly achieved the right balance of elements to provide the

male middle-classes with relaxing reading which flattered them by providing an intellectual adventure, while assuaging their anxieties about the modern world. The stories celebrate the materialism of the age, showing that the ordinary small objects of everyday existence, if observed properly, have stories, create atmospheres, point directions. At the same time, they celebrate the capacity of rationalism to organize the material of existence meaningfully, and the power of the rational individual to protect us from semiotic and moral chaos. Yet the crimes are rarely excessively troubling (and, although we do find murders, on the other hand in many stories there is no crime at all). Holmes deals largely with family irregularities and the consequences of selfishness, rather than dangers endemic to the system. (Kayman, 48-49, 下線強調は筆者)

ここから分かるのは、主要な読み手が中産階級であったこと、社会不安を鎮めるイデオロギー的機能を果たしていたこと、物質中心主義が描かれていること、合理主義が世界のまとめ役であったこと、理性的な一個人が、社会の道徳的な混沌から読者を守ったこと、事件自体は、だいたい家族問題や利己主義のもたらしたもので、犯罪らしい犯罪はそれほど多くはないということである。中産階級を安心させるイデオロギー的機能については、ナイトの論文がそれを詳細に論じ (*Form and Ideology*)¹、トンプソン (Thompson) も、コナン・ドイルの探偵物語は、ただ単に中産階級の所与のイデオロギーを反映しているだけではなく、"his reworking of an ideology of empiricism in a popular form helped produce a comforting and reassuring image of society untroubled by sexual, economic, or social pressures"(75) と述べている²。Jann はホームズの捜査のやり方は、"to protect social order by a continual reiteration of normalcy"(686-7) と述べているが、ここでいう秩序とは中産階級がヘゲモニーを握った秩序のことである。批評家の D.A.ミラー (Miller) は、『警察と小説』というディケンズ、コリンズ、トロロープを扱った書物の中で、フーコー的な

社会の規律の問題が初めてイギリスの小説に登場したのはディケンズにおいてであると述べており、先述したナイトも、規律(的)というフーコー的な術語を用いてホームズの部分を論じている(*Crime Fiction* 55-63)。トマス(Thomas)は、ディケンズやコリンズが登場してからは、これまでのように追われる犯罪者がヒーローとなる話から、追う側の探偵・刑事がヒーローとなる話へと移行したと指摘した上で、フーコーを引き合いに出し、次のように述べている。

In the post-Benthamite world of what Michel Foucault called the "panoptical machine," where the individual is not so much repressed by the social order as fabricated and scrutinized in it, the literary detective provides a new kind of hero, dramatizing the powerful and productive role of the social order in the process of making modern citizens. (Thomas 176)

つまり、文学に登場する探偵役の人物がヒーローとなり、社会秩序を維持し市民を作り上げる上で重要な役割を演じるようになったというのである。ホームズは、ディケンズやコリンズよりも1世代後に出てくるが、ミラー、ナイト、トマスの言うような流れの中にあると言える。

本稿では、ケイマンの主張を、フーコーの規律=訓練のテクノロジーの考え方を使得って言い換えることによって、世紀末イギリスの管理社会の中で、中産階級をいわば安心させた、探偵ホームズの姿を追い、フーコーの展開する壮大なスケールの社会観、歴史観という土俵の上で、ホームズの物語がどのように見えてくるのかを探求する。ある術語を使得って言い換えるというのは、単なる機械的な操作ではなく、ものの新しい見方、新しい世界を提示することでもある。それを本稿はめざしたい。

フーコーは、18世紀に規律=訓練的社会が西欧に出現し、19世紀にはその傾向が強まっていったと述べている。その規律=訓練のテクノロジーは、制度と同一のものではないが、監獄、軍隊、学校、病院、工場などの制度的場所で

はきわめて効率的に展開していくという。このような規律=訓練のテクノロジーは、規格化(normalization)と可視性(visibility)によって維持されていると言う(『監獄の誕生』の特に第三部「規律・訓練」;ドレイファス&ラビノー第7章および第9章)。規格化とは、探偵小説に適用すれば、何らかの犯罪行為、違反行為によって破壊されつつある秩序を矯正して元に戻そうとする作用のことであり、可視性は、探偵が犯人を追いつめていくのに使う手段や道具のこと、また探偵の個人的な資質・能力のことであると言える。ここではまず初めに、規格化を見ていくことにする。

1. 規格化

規格化と言った場合に、ホームズの作品では、どのような秩序を想定し、またそれがどのように脅かされているというのだろうか。工場や学校や軍隊では、たとえば遅刻や欠席、不作法、言葉使いの悪さ、だらしのなさ、性的にみだらな行為が懲罰による規格化の対象になっていたとフーコーは言う(『監獄の誕生』182)。ではホームズでは、どうだろうか。ケイマンの引用からも推測できるように、ホームズでは、守られるべきは中産階級の秩序、道徳観、価値観である。ホームズが引き受ける事件は、ほとんどが、何らかの形で家族問題であり、それと結びついたリスペクタビリティや財産の問題である。そこで、**ジェンダー、階級、大英帝国の問題**に分けてこの問題を少し細かくみてゆきたい。

<ジェンダー>

ホームズの物語に登場する女性を見ていくと、白人の中産階級女性の中には、キャサリン・ベルギーが言うように、「踊る人形」のエルジー・キュービット(夫を失ったショックによる自殺未遂で意識不明の重体)や「背の曲がった男」に登場するパークレー夫人(夫が倒れたのを見て熱病にかかる)のような、意識を失って沈黙する謎めいた女性として描かれている者がいる。ベルギーは、この種の女性の存在は、科学の言説が支配的なヘゲモニーを握っているかに見えるホームズの物語で、その科学の万能性というイデオロギーに疑義を提示する役割を果たしており、脱構築しているのだと言う(101-108)。たしかにそう

いう見方も可能だが、単純にショックで意識を失ってしまうような弱々しい女性、慎ましい家庭的な中産階級女性を描いたものであると取ることも可能であろう。実際、そのような女性はホームズの物語の中に華々しさはないが、ひそやかに存在している。『四つの署名』で登場してワトソン博士と結婚するメアリー・モースタン嬢は、非常に慎ましやかな女性としてワトソンが好みそうな中産階級女性として描かれ、ワトソン夫人として幾つかの作品に登場する。父親の宿敵の息子ジェイムズと結婚するアリス・ターナー（「ボスコム谷の秘密」）、後に見ていくことになる「唇のよじれた男」に出てくる主人公の妻クレア夫人、義父に殺されかけはしたものの最後には婚約者との結婚が待っている中産階級女性のヘレン・ストーナー嬢（「まだらの紐」）、中産階級における女性の神聖な道徳的役割を割り振られた女家庭教師のダンバー嬢（「ソア橋事件」）などがあげられよう。中産階級の価値観の守り手である家庭の天使は確かに、ホームズの作品中、空気のように存在している。ただ、「孤独な自転車乗り」の、今は亡きオーケストラ指揮者の娘ヴァイオレット・スミスになると、ジェンダーの点では微妙である。彼女は、世紀末の90年代に女性の間で流行した自転車を乗り回す活発な女性として描かれている³。その意味ではニュー・ウーマンとっていい存在であるのだが、最後にはミッドランド電気会社のエンジニアと結婚するのであるから典型的な中産階級女性の進路を歩む女性でもある。

女性でありながら、プロットの中で派手などうか、活動的な役割を与えられているのは、イギリス人女性ではなく、主に外国人女性である。それは、ナイトの言うように、男性優位を脅かす可能性のある女性を醜い外国人にしてしまえば、女性の力と官能性に距離をおくことができ、まかり間違ってもその毒牙にイギリス人男性がかかっても、イギリス社会が内部の敵に脅かされることはないのであるから安心だということであろう（"Great Detective" 374-377）。このような外国人女性の典型は、女嫌いである有名なホームズが、愛情とも取れなくもない親愛の情を抱いたアイリーン・アドラーである（「ボヘミアの醜聞」）。彼女はアメリカ出身の、ヨーロッパで活躍する元オペラ歌手である。ワルシャワにいた頃、ボヘミア王と仲良くなり、そのときに撮った二人の写真で国王をゆすり正当な結婚を邪魔する可能性があったので、ホームズがその写真を取り

返そうと乗り出す。結局はホームズの失敗に終わったものの、彼女からはその写真を利用しないとの言質を得ることができて万事めでたしという話である。彼女は、変装したホームズにしてやられると、負けじと今度は自分が男に変装してホームズに仕返しをするという男勝りのところのある女性で、"the face of the most beautiful of women, and the mind of the most resolute of men"（「ボヘミアの醜聞」）と、男性的な女性として描かれている。ホームズも "when he speaks of Irene Adler, or when he refers to her photograph, it is always under the honourable title of *the woman*."（「ボヘミアの醜聞」）と賛嘆を惜しまない。

その他に、活動的な外国人女性を何人かあげると、「花嫁失踪事件」の失踪したアメリカ人花嫁ハティ・ドーラン、「ギリシア語通訳」のギリシア人娘で殺された兄の復讐を殺人犯に対してするソフィー・クラティデス、「金縁の鼻めがね」のロシア人革命家アンナ、「アビー農園」に登場するオーストラリア生まれで、感受性豊かな元気のいい女主人レディ・ブラケンストール、「三破風館」の男好きなスペイン女性イザドラ・クラインをあげることができよう。

以上、ジェンダーという観点から見ると、中産階級家庭の神聖さを支える役をするイギリス人女性は、目立たないながらも空気のように存在しており、波乱を起こす可能性のある女性は外国人女性として距離を置かれ、彼女たちの方に積極性がみられる。かくてイギリス社会からは女性の脅威は取り除かれる。

<階級>

ホームズの作品では階級問題が階級対立として政治問題化した形ででてくることはないが、階級意識が深く絡んだ作品に「ねじれた唇の男」がある。あらすじを述べると、中産階級ジャーナリストのネヴィル・クレアが乞食についての記事を頼まれて実際に乞食をしてみると、思いのほか実入りがいいことが分かり、今度は、借金で首が回らなくなった時に、乞食業をやり返済、そのまま、ロンドンの実業家ネヴィル・クレアという家族向けの顔とヒュー・ブーンという名前の乞食という二つの顔を使い分ける生活をしていくという話である。しかし、シティに来た妻にロンドンの逗留先として使っていた阿片窟で見とがめ

られ、逃亡失踪する。それがネヴィルは殺害されたという、自分の殺人事件へと発展し、乞食のブーンがネヴィル殺害の犯人として拘留される。つまり自分の殺害犯として自分が捕まったわけである。夫の捜査を依頼されたホームズは、拘留されている乞食のブーンの変装を見破り、ネヴィルであることを露見させる。ネヴィルは、リスペクタビリティの上から、家族には口外してほしくないと言われ、ホームズに頼み、探偵はそれを受け入れる。

ネヴィル・クレア氏こと乞食のヒュー・ブーンは、階級という点でみても、下層階級の最底辺にまで落ちたと言えるが、中産階級から下層階級へと落ちぶれた者の物語とは単純に言いきれないところがある。職種と収入との間にねじれ構造が生じているからだ。ネヴィルは夕刊の記者という中産階級のリスペクタブルな職業から、乞食という最底辺に転落したにもかかわらず、収入は、週2ポンドから、週12ポンドへと増加し、年収にすると700ポンドまで稼ぐようになる。お金がたまると郊外に家を購入し、結婚して妻と二人の子どもまで養えるようになったということは、現実そんなことがあり得たのかどうかは別として、きわめて皮肉なことだ。本来ならば、落ちぶれたという表現がぴったりであり、真相発覚後も公にされることを極端に嫌ったくらい、ネヴィルには、乞食業がリスペクタブルな職業でないことは分かっていたにもかかわらず、収入がよいために辞められなかったといういきさつがあるからだ。この状況は、平均年収300ポンドで暮らしていた、リスペクタブルな中産階級とは一体何なのだろうかという問題を突きつける。それと同時に、当時の中産階級の人間が、一つ下の労働者階級、下層階級に落ちることを恐れていたという事実を新しい目で眺めることを可能にしてくれる⁴。すなわち、一つ下の階級へ落ちることは、最後はお笑いになってしまうたぐいのものである（終わりよければすべてよし）と同時に、一度落ちて何かのきっかけがあれば、はい上がり戻ってこれるのだという一種の安心感のようなものを中産階級読者に与える毒抜き効果があったのではなかろうか。このあたりの問題解決の仕方には、ナイトのいう社会不安を押さえ込むイデオロギーの働きを見て取ることができよう（*Form and Ideology* 5）。

<大英帝国>

次に大英帝国の問題へ移ろう。19世紀は18世紀と同じく大英帝国の拡張期であった。植民地を世界各地に持ち、首都ロンドンには、植民地からやってくる移民の集まる多民族都市であった。そのような首都の状況を反映して、ホームズの物語の中には、多種多様な植民地帰りのイギリス人や、植民地からイギリスにやってきた現地人が登場する。そのような植民地と関係のある人間は、犯罪をもたらす悪の存在として描かれることが多い⁵。それは、ドイル自身が帝国主義戦争にも自ら参加したことがある、大英帝国万歳を唱える愛国主義者であったこととも関係するのであろうが（トンプソン 68；『わが思い出と冒険』）、ここにはエドワード・サイードの言うオリエンタリズムの状況がある⁶。非西洋＝悪という図式が成立していると言えよう。

まずは、悪の温床たるインドが背景にある「まだらの紐」を見てゆく。あらすじを述べよう。ロイロット医師は、ストーク・モーランに居を構えるイングランドの零落した旧家ロイロット家の最後の一人。インドで開業し成功していたが、インド人執事を盗みの容疑で殴打して死に至らしめ、監獄に入れられる。後に、失意の人として帰国し、ベンガル砲兵隊の将校ストーナー少将の未亡人と再婚する。ストーナー夫人の方は、まもなく鉄道事故で死亡したので、最初の夫との間にできた娘のジュリアとヘレン姉妹はストーク・モーランでロイロット医師に育てられた。ロイロット氏は近所でも評判な乱暴者で閉じこもりがちであったが、家の遺伝病と熱帯の気候の影響だろうと言われており、チーターやヒヒといったインド固有の動物にも愛着を抱いていた。結婚を間近に控えたジュリアは、結婚によって未亡人から譲り受けた遺産が財産分与によって目減りすることを厭った義父のロイロット医師に殺害され、ヘレンもインドの毒蛇を使った同じ方法で殺害されそうになったが、依頼を受けたホームズはストーナー家の遺産が動機であると見抜いて、第二の殺人を阻止、ロイロット氏はその蛇に咬まれて死ぬが、蛇の行動をホームズは予測していた。ヘレンはアーミテージ氏の息子パーシー・アーミテージと無事結婚できることになった。

ここでは、インドに滞在しているうちに、気候のせいで生来の乱暴でうちとけないところがひどくなり、インド人召使いを殴り殺して牢獄暮らしを経験し

たロイロット博士が、祖先の家ストーク・モーランに帰還、その後たびたび隣人とトラブルを起こしながら、再び殺人を犯す。しかもインドから持ち帰ったチーターやヒヒという動物が殺害手段であると臭わせながら、実際にはインドの毒蛇が殺害手段であったという設定である。明確にインド＝悪という図式の中で捉えられている。ロイロット博士のインドで増幅された東洋的な暴力的気質、非合理的な気質とそれがもたらした、財産目当ての第二の殺人は、ホームズによって見事に阻止され、このことは、ホームズが、上層中産階級の財産と新しい中産階級家庭の誕生を助けたことを意味する。この間、ヘレン・ストーナーは、財産の所有者でありかつ自身が財産でもあるという曖昧な状況の中で、財産を自由にできる独立した生活を与えられることはなく、中産階級的な理想の結婚生活へと入っていく。かくして家父長制は安泰であり、この物語のイデオロギー的な機能は果たされる (Hennessy and Mohan)。

このほかに、「背の曲がった男」という作品でもインドが登場する。インド大反乱 (セポイの乱) の際に、裏切られたイギリス軍兵士ヘンリー・ウッドが拷問を受け辛酸をなめきった上で、醜い身体を引きずるような生活をインドでしていたのだが、望郷の念から、何十年ぶりかでイギリスに帰ってくる。つらい運命に落ちる前に好きあっていた女性は、インドで自分を裏切って今は将校になっている当のバークレー大佐と結婚していることを知っていた。その大佐のもとにいる彼女に会おうと突然訪問すると、偶然会ってしまった大佐は長年の良心の呵責に耐えかねて途中で死んでしまう、というのがストーリーだ。この話も、インドが裏切りや拷問の行われる悪の場所として設定されている。ただ、面白いのは、良心の痛みという心の問題を扱っている点が探偵ものとしては興味を引く。これもまた、中産階級の道徳意識に訴えるテーマであったのではなかろうか。

インド以外の国では、下の表をみると分かるように、アメリカ、オーストラリア、ドイツ、オーストリア、イタリア、スペイン、ロシア、南アフリカ、中南米等、また民族的にはケルト人が登場するが、皆悪役を割りふられている⁷。例外を二つあげよう。「サセックスの吸血鬼」という話では、夫は再婚したペルー人妻が吸血鬼かと思ったら、自分たちの赤ん坊を救うため毒を吸い取って

いたのがわかったという、滑稽味のある話となっている。だから、ペルー人妻は南米出身であるが、悪ではない。むしろ、夫の初婚でできた身体障害を持った息子 (金髪、青い目) が、義理の弟になる、健康な赤ちゃんに対して嫉妬を抱いたことで引き起こされた事件として、イギリス＝悪という設定になっている点がきわめてユニークと言えよう。『バスカーヴィル家の犬』では、犯人ステイプルトンのスペイン人妻ベリル (コスタリカ生まれ) は、夫が自分を利用するだけ利用し、別の女に心が傾いたと夫から聞かされるやいなや、嫉妬から逆上し、夫ステイプルトンの隠れ処をホームズらに教える。ここでは嫉妬はマイナスの感情かもしれないが、行為自体は社会秩序に貢献する方向を向いているので、中南米＝悪という図式の例外である。

<大英帝国その他諸外国> 非イギリス＝悪

1. インド (その周辺) の悪: 「ねじれた唇の男」の阿片窟の経営者 (元東インド会社船乗り) と手伝い (マレー人), 「まだらの紐」のロイロット博士, 「背の曲がった男」のバークリー大佐, 『四つの署名』のアンダマン諸島人トンガ
2. アメリカ: 「5粒のオレンジの種」のKKK, 「踊る人形」に出てくるシカゴ・ギャングのエイブ・スレイニー, 『緋色の研究』のモルモン教徒, 「三人ガリデブ」のキラール・エヴァンズ, 「三破風の冒険」に出てくる黒人ボクサーのスティープ・ディクシー, 『恐怖の谷』の暴力団である「自由民団」
3. オーストラリア: 「ボスコム谷の秘密」の元山賊ジョン・ターナー
4. ドイツ: 「技師の親指」の偽金作りたち, 「最後の事件」のモリアーティ教授, 「最後の挨拶」に出てくるドイツ人スパイのフォン・ボルク
5. オーストリア: モリアーティに匹敵する大悪党のグルーナー男爵 (「高名な依頼人」)
6. イタリア: 秘密政治結社「赤い輪」の凶悪犯ゴルジアーノ (「赤い輪」)
7. スペイン: 浮き名を流すイザドラ・クライン (「三破風の冒険」)

8. ロシア：ロシア人革命家ニヒリストのアンナ（『金縁の鼻めがね』）
9. 南アフリカ：「孤独な自転車乗り」の南アフリカの悪党ジャック・ウッドリー
10. 中米：「ウイステリア荘」の中米の元独裁者ドン・ムリーロ
11. 南米：「ソア橋」のギブソン夫人（マリア・ピント）（ブラジル生まれ）
12. ケルト人：「マスケレイブ家の儀式」の犯人（メイドのレイチェル）；ユダヤ人：「株式仲買人」の犯人アーサー・ピンナー
13. 例外：「サセックスの吸血鬼」では、ペルー人の後妻ファーガソン夫人は吸血鬼ではなかった；『バスカーヴィル家の犬』では、ステイブルトンのスペイン人妻ベリル（コスタリカ生まれ）は嫉妬からとはいえ、犯人である夫ステイブルトンの隠れ処を教える。

2. 可視性

以上、規格化（ノーマライゼーション）の観点から、ホームズがいかに中産階級の価値観を守る役割を果たしていたかを、幾つかの作品に即して見てきた。これからは、規律＝訓練のテクノロジーを構成するもう一つの要素である、可視性（visibility）について見てゆきたい。

<ホームズの資質>

ホームズは、事件の起こるロンドンという空間をつぶさに知り抜いていて、スラムから裏道からすべてを知り尽くしているが（「空き家の冒険」）、それは自らの能力のおかげであるばかりではなく、援助者の力のおかげでもある。ベイカーストリート・イレギュラーズ（ベイカー街遊撃隊）と呼ばれる浮浪児の集団を雇って、情報収集や張り込みをさせ（『四つの署名』）、またロンドン中のゴシップに通じている情報提供者ラングデイル・パイク（「三破風館」）を抱え、犯罪世界に関する情報提供者としてはシンウェル・ジョンソン（「高名な依頼人」）がいる。このことから考えて、十分な情報を得た上で、犯人や容疑

者が、いつでもしかるべき推論を経れば、すぐにホームズの目の前に連れてくることができるか、ホームズ自身がその者たちのいるそばに行ける状態にあるという点で、可視性は確保できていると言えよう。また、ホームズが可視性ということ意識している点は次の引用からもわかる。

If we could fly out of that window hand in hand, hover over this great city, gently remove the roofs, and peep in at the queer things which are going on, the strange coincidences, the plannings, the cross-purposes, the wonderful chains of events, working through generations, and leading to the most outré results, it would make all fiction with its conventionalities and foreseen conclusions most stale and unprofitable. ("A Case of Identity" in *The Adventures* 30)

空を飛ぶことができ、屋根をはいでみれば、その下では、虚構の物語もかなわないような不思議な出来事、偶然、策略の立案等が行われていようというのである。これは、高山宏氏によれば、安全な高みから下界の死と病の世界を見下ろしたいという、同時代の人々の持っている俯瞰の欲望の一例ということになるのであろうが（『特殊講義』22-25）、フーコー流に言い換えれば、可視性を維持して、起こっている出来事を掌握し、管理しておくことにつながり、いわば、規律＝訓練の権力を行使するとはどういうことかを視覚的イメージとして説明したものと言えよう。

可視性を維持すると言った場合、捜査対象となる人物や事物の可視性はどのようにして確保されるのかを考えると、先ほど見た情報提供者を使いこなすホームズに加えて、ホームズがどのように造型されているのかをしてみるのが重要である。

よく言われるホームズの科学的合理主義は、この可視性を維持するのに必要な能力であると言えよう。それは観察と推論の能力である⁸。彼は、取るに足りないささいな事物にも手がかりがあるとする態度で、どのような微視的な、小さなものもゆるがせにせず観察する。どのような日常的な小さなものも彼の

視野には入ってくる。そのためには七つ道具の一つである虫眼鏡を用い、場合によっては顕微鏡を用いてミクロの世界までも可視的にする⁹。理論を構築する前に徹底的に事実を積み上げ、その後の推論は、結果と原因の因果の連鎖で行う（「五つのオレンジの種」）。彼が、'reasoning and observing machine'（「ボヘミアの醜聞」）と言われる所以である。ホームズはクライアントを一目みただけで、その人物の職業や性格、行動まで正確に推論するという、我々読者を魅了してやまない能力によって¹⁰、高山宏流に言うところ、いわば人間をテキストとして読む、その人間の外面を説明し尽くすのである¹¹。ただ、これは規律＝訓練のテクノロジーとの関係で言い直せば、目の前にいる人間を可視化することに他ならない。この推論能力は、目の前にいる人間のみならず、いわゆる証拠となるもの、つまり筆跡、タイプライター、タバコの吸い殻、足跡、自転車のタイヤの跡、踊る人文字のようなものにまで向けられる。このささいな手がかりを解釈して、それを関係のある人物の正体へと結びつけ、我々の前にその関係者を、目に見えるようにしてくれる、それがホームズの推論能力なのである。

ホームズの推論能力を支えるものとしては、文書情報の活用があげられよう。過去の事件をファイルにして索引まで作ったデータベース（「ボヘミアの醜聞」、「花婿失踪事件」等）や、犯罪捜査に必要な限りでの百科事典的な該博な知識があげられよう（『緋色の研究』第二章、「五つのオレンジの種」、「ライオンのたてがみ」）。また、ロイドの船名登録簿や発着時刻表（「五つのオレンジの種」）、民法博士会館における遺産関係書類（「まだらの紐」）、聖職者本部に登録された聖職者リスト（「孤独な自転車乗り」）、アメリカの警察における犯罪者リスト（「踊る人形」）、古い新聞記事の切り抜きのファイル（「六つのナポレオン」）、大英図書館の資料（「ウィステリア荘」）、新聞の「身の上相談欄」や「私事広告欄」（尋ね人、遺失物、離婚広告など）の切り抜きファイル（「赤い輪」）、ペルメル船舶会社の船に関する情報（「アビー農園」）、年鑑や至急報などの山（「パールをかぶった下宿人」）などの、記録文書の存在がホームズの知識の後押しをする。このような文書類は、規律＝訓練のテクノロジーの実践においてもきわめて重要な道具であるとフーコーは述べている（『監獄の誕生』192-

95)。このような書類は支配を被る全員を個別化し、それによって可視化する装置なのである。

ホームズの推論能力を弱め、ゆがめるものとして、ホームズは女性を敬して遠ざける。女性が非合理的な存在、男性の合理性を弱める誘惑的な存在であるとするジェンダーの力がここには働いているとっていいだろう（「ボヘミアの醜聞」）。女嫌いと言えるほどに愛や感情を超越している、という性格造型になっている点に、彼が規律＝訓練社会の申し子である点が反映している。また、ホームズがスポーツマンであり、ボクシング（『四つの署名』第5章、「五つのオレンジの種」、「黄色い顔」、「グロリア・スコット号事件」、「孤独な自転車乗り」）とフェンシング（「グロリア・スコット号事件」）の腕前は並はずれたものであるという点も、スポーツが規則を重視することを考えると、彼が規律＝訓練的な権力の枠組みの中で動いている人間であることが見て取れよう。

捜査対象の可視化に貢献しているものとして、他には、頻りに出てくる変装がある。彼はロンドンに五つの隠れ家を持ち、そこで変装をするのだ（「ブラック・ピーター」）。「ボヘミアのスカンダル」や「ねじれた唇の男」でも、ホームズは馬丁や牧師、老人に変装して、情報収集に余念がない。ときには、犯罪者の側が、変装をすることもある。その場合は、犯罪者の方が可視化を逃れようとしているわけだ。

<告白>

規律＝訓練のテクノロジーを行き渡らせるのに必要な要素としての可視化の問題をホームズの人物造型、彼の合理主義等との関係で見えてきたが、可視化に貢献するものとして、もう一つ大事な儀式のようなものがある。それは「告白」である。規律＝訓練と管理をめざす社会の中で、「告白」は重要な要素をなす。それは「告白」が、「専門家の助力を得て、自己自身について真実を語りうる」との確信（ドレイファス&ラビノー 242）に支えられた自己のテクノロジー、つまり「われわれの最深部の自己を暴くと考えられる特殊なタイプの言説」（ドレイファス&ラビノー 241）だからである¹²。自己の真実を産出し可視化するのが「告白」である。

フーコーは、西洋社会における告白の重要性に目を留めるが、18世紀から19世紀にわたって、告白が宗教的な告解の場だけではなく、次第にさまざまな領域に、たとえば教育や医学、犯罪捜査の現場へと広がっていったと述べている。本稿はフーコーを下敷きに用いているので、よく知られた点ではあるが、フーコーの言葉にしばし耳を傾けてみよう。

告白は、西洋世界においては、真理を生み出すための技術のうち、もっとも高く評価されるものとなっていった。それ以来、我々の社会は、異常なほど告白を好む社会となったのである。告白はその作用をはるか遠くまで広めることになった。裁判において、医学において、教育において、家族関係において、愛の関係において、最も日常的次元から最も厳かな儀式にいたるまでである。自分の犯した犯罪を告白する。宗教上の罪を告白する。自分の考えと欲望を告白する。自分の過去を自分の夢を告白する。自分の幼児期を告白する。自分の病と悲惨を告白する。人は懸命に、できる限り厳密に、最も語るのが難しいことを語ろうと努める。公の場で、私の場で、両親に、教師に、医師に、愛する者たちに告白する。人は、他の人間では不可能な告白を、快樂と苦しみの中なかで、自分自身に向かってし、それを書物にする。人は告白する一というか、告白するように強いられているのだ。告白が自発的でないか、あるいは内的な要請によって強制されていない場合には、告白は奪い取られる。人は告白を魂の中から狩り出し、肉体から奪い去る。中世以来、拷問は告白には影のようにつきまとい、告白が力を失いそうになると、それを支えてやる。両者は黒い双子なのである。最も優しい愛情がそうであるように、権力の最も血腥いものも、告白を必要としている。西洋世界における人間は、告白の獣となった。」(『性の歴史 I』76-77)

このような西洋世界の好むとされる告白は、宗教的な告解の場から広々とした世界へと広がることによって、近代社会の規律＝訓練の権力と手を携えることになった。フーコーは、告白は権力関係において展開される儀式であると言っ

ているのだから、宗教制度の外でも告白が多用されるようになるのは、権力が風のように至るところに存在するとするフーコーの立場からすれば不思議なことではない。告白が権力関係において存在するというのは、告白は聞き役である相手が必要とし、その相手が、「単に問いかけを聴き取る者であるだけではなく、告白を要請し、強要し、評価すると同時に、裁き、罰し、許し、慰め、和解させるために介入してくる裁決機関」(『性の歴史 I』80)だからである。

さて、ホームズの物語というのは、そもそも構造的にみて、三つの部分から構成されているのが普通である。①依頼人による事件の語り・告白 ②ホームズによる調査または思索 ③ホームズによる事件の解説または犯人による告白・自白、という三つの部分である¹³。告白は物語の本質的な部分を構成していると言っている。というのは、ホームズの依頼人は抱えている問題を自発的に告白し(語り)、ホームズはそれがどういう問題であるかを解釈し、読者に問題を可視化して見せ、犯人がホームズの説明に足りない部分を告白・告白という形で補うときもあるからである。

いずれにせよ、告白の例は数多いが、その中でも特に、犯人の告白が最初から重要な地位を占めている作品がある。『シャーロック・ホームズの事件簿』に入れられた「ヴェールをつけた下宿人」である。冒頭、人に顔を見せるのを極端に嫌がる女下宿人ロンダー夫人が、自分の死期の近いことを悟り、自分の過去の良心の重荷を降ろそうと、誰かを呼んでもらおうとする。

'Her[veiled lodger's] health, Mr Holmes. She seems to be wasting away. And there's something terrible on her mind. "Murder!" she cries. "Murder!" And once I heard her, "You cruel beast! You monster!" she cried. ... "Mrs Ronders," I says(sic), "if you have anything that is troubling your soul, there's the clergy," I says, "and there's the police. Between them you should get some help." "For God's sake, not the police!" says she, "and the clergy can't change what is past. And yet," she says, "it would ease my mind if someone knew the truth before I died." "Well, " says I, "if you won't have the regulars, there is this

detective man what we read about"-beggin' your pardon, Mr Holmes. And she, she fair jumped at it. "That's the man," says she. "I wonder I never thought of it before. Bring him here, Mrs Merrilow[landlady], and if he won't come, tell him I am the wife of Ronder's wild beast show. Say that, and give him the name Abbas Parva." Here it is as she wrote it, Abbas Parva. "That will bring him, if he's the man I think he is." ("The Veiled Lodger", 下線強調は筆者)

呼んだのは、聖職者でもなければ、警察でもなく、探偵であるホームズであった。ホームズを指名したロンダー夫人は、過去に起こった夫の悲劇的な死が自分と恋人との共謀による殺人事件であることを告白する。

その告白の内容は次のようなものであった。かつてロンダー夫人は、「サハラ王」という名のライオンのショウが売り物のロンダー・サーカスにいた。サーカスのオーナーのロンダー氏は乱暴な男で、それ故にサーカスは落ち目であった。また、いつもロンダー夫人に暴力を働いていた。ある夜、悲劇が起こる。いつものように夫婦そろって食べ物をライオンに持って行ったところ、夫妻は襲われ、夫のロンダー氏は後頭部を爪でひっかかれて殺され、妻の方も、命だけは奪われなかったものの、顔面を爪でひっかかれて、見るも無惨な姿になるという悲惨な事件が起こったのである。実はこれは、一座のレオナードが、夫の暴力を受けて苦しむ、愛するロンダー夫人のために、ライオンの爪に似せた鉄の武器を作り、ロンダー氏を殺害、夫人は夫がライオンに襲われたように見せかけるため、檻をあけたところ、血の臭いに興奮したライオンが夫人に襲いかかり、臆病風に吹かれてしまったレオナードは、逃げてしまったというのが真相であった。警察は事故として処理したが、夫人は長い間、世を忍ぶ生活を強いられ、事件のことは一切口外しなかったが、それは恋人レオナードのことを思っていたことであった。その彼が亡くなったことを新聞で知った今、ロンダー夫人は、ホームズにすべてを告白する気になったのである。告白後、彼女はホームズの忠告を受け入れて、自殺を思いとどまる。

ホームズは話の聞き役にまわるだけで、調査、推論は一切しているわけでは

ない。過去に起こった殺人事件の共犯者からその事件のあらましを聞くのみである。この告白によって、ヴェールの夫人は良心の重荷を解かれたことを考慮すると、ホームズはフーコーが「主体と権力」という論文の中でいうところの牧人＝司祭型権力を行使しているのだと言えよう（ドレイファス&ラビノー 293-295）。その牧人＝司祭型権力は、キリスト教の司祭に典型的に見られる宗教的なタイプ（来世における個人の救済、信徒のための自己犠牲、個人の人生に焦点、良心の教導）から、教会制度の外に位置する国家その他の制度を中心とする世俗的なタイプ（現世における救済（健康・福祉・安全））へと18世紀に移行していったとフーコーは言い、後者のタイプとしては、国家制度、警察、私企業、福祉団体、慈善家、医療機関、家族等をあげている。ロンダー夫人は、引用から分かるように警察も聖職者も拒絶した。このことを考えると、ホームズはどちらのタイプに属するとも言えないのだが、ロンダー夫人の良心の問題に関係していたということを重視すると、どちらかと言えば前者の伝統的な司祭の執行する牧人＝司祭型権力に近いと言えるのではあるまいか¹⁴。

規律＝訓練的なテクノロジーという観点から見ると、先に述べたように告白の場は権力関係において展開する儀式でもあるから、ホームズは聞き役に回り、真実を産み出す自己のテクノロジーを行使するロンダー夫人を可視化していると言えよう。新聞も警察も不運な事故としてしか把握しきれなかった、このサーカス一座の座長の殺人事件のあらまし、事の真相をホームズは知ることになった。これにより、ホームズの規律＝訓練的なテクノロジーの使用によるロンドンの掌握、ロンドンの秩序の維持機能は高まるのである。結末でヴェールの夫人が自殺しようとして持っていた毒薬を放棄したのが、ホームズの忠告によるものであったこと、その忠告内容が、「忍耐の人生も他人の模範となりうるのだ」というような中産階級的な道徳であったというのは、いかにも中産階級の価値観の守護者のホームズに似つかわしい。また、そういうことと言えば、そもそも夫のドメスティック・ヴァイオレンスが問題で起きた事件ということで、階級こそ中産階級ではないが、この短編もやはり本質的には家庭の問題であったことがうかがわれる。

<ホームズと警察>

さて、ここからは話をホームズ対警察（法）の話に持ってゆきたい。探偵も警察も、どちらも規律＝訓練の権力を働かせる装置であり、中産階級の価値観（私有財産と家庭）の擁護者として捉えることができるのであるが、ホームズはその中産階級社会の真ん中に位置しているというよりも、その周辺に、あるいはときにそのすぐ外にいないかと思われるときがある。まずは、家庭を神聖視する中産階級社会の擁護者であるにもかかわらず、本人は、独身者であり家庭の感覚を欠いている（富山 19）。周知のように彼は、ボヘミアンにしてコカイン中毒者で（『四つの署名』、「黄色い顔」）、だらしのないところがあり、部屋の壁に実弾で模様を描いたりするような奇矯な行為をする人間である（「マスグレブ家の儀式」）。この逸脱は、ホームズと警察とははっきりと区別するものであるが、これには、プラス面とマイナス面があるように思われる。

プラス面としては、この逸脱あるがゆえにホームズは、階級社会のプロプライエティにこだわることなく、どの階級社会にも、どのような場所にも出入りできる自由度を獲得するのであり、それがまた、これまでも強調してきた捜査対象や人間の可視性へとつながってゆくのである。

また、警察と違って、公的な立場からくる義務が少ないので、必要に応じて、プライバシーを守り、問題を不問に付すことも一存でできる。このプライバシーと警察の関係について、D.A.ミラーの言わんとするところをまとめると次のようになる。ヴィクトリア朝中期のディケンズやコリンズの探偵小説では、警察が犯人探しに果たす役割はそれほど大きくなく、素人の登場人物が協力して犯人探しをするような設定になっていることが多いが、これは、上流・中流の家庭の中に警察が入ってくることを嫌い、プライバシーを守ろうとする態度の表われである。警察が階級の壁を越えて、ずかずかと容疑者はいないかと家庭の中に入って、プライバシーを侵害してくるよりは、警察抜きで自分たちだけで犯人探しをしたほうが良いというイデオロギーが働いているのだ。

プライバシーに対する厳格な姿勢は世紀末に至ってもあまり変わっていないようで、ホームズの物語において、ワトソンが冒頭、プライバシーに配慮した

ことにたびたび言及するのはこの表われである。また作品中、プライバシーをないがしろにするという理由で、探偵嫌いをホームズに標榜する人物が登場するときもある（「スリー・クォーターの失踪」）。しかし、そういった人物の誤解をといて信頼を得、ある作品では積極的にスキャンダルのみ消しにまで手を出す場合がある（「スリー・クォーターの失踪」）。「ねじれた唇の男」でも、ホームズがリスベクタビリティに対する配慮から事件を表沙汰にしなかったことが思い出されよう。このようなプライバシーに対する配慮が自由にできるのもホームズの逸脱的な気質が象徴するような自由な立場ゆえであると言えよう。

プライバシーへの配慮の問題だけならば、それは基本的に中産階級のリスベクタブルな家庭を守ることにつながるから、ホームズの逸脱は許容されるであろうが、ホームズが自らを、警察権力・社会の法の上にたつ上級の法であると宣言するところまでいくと¹⁵、これは規律＝訓練の権力が働いている社会においてどのように捉えたらよいだろうか。ホームズのこのような姿勢は具体的には、法律には欠点があるとして、ホームズ自身が法律に抵触するようなことをすることにもつながっている。警察が認めないような不法住居侵入をしたり（「チャールズ・オーガスタス・ミルヴァートン」）、殺人を正当防衛として認めたり（「アビー農園」）、私的復讐を認めたり（「悪魔の足跡」、「ギリシア語通訳」）、犯人を自分の判断で逃したり（「マスグレブ家の儀式」「青いガーネット」）、犯人の死を間接的にもたらしたりする（「まだらの紐」）。「チャールズ・オーガスタス・ミルヴァートン」という作品では、ロンドンのゆすり王ミルヴァートンが、夫を死に追いやるきっかけを作ったとして、さる貴婦人の恨みを買う。ホームズとワトソンは、ミルヴァートンがその貴婦人によって射殺される部屋にたまたま居合わせたにもかかわらず、ゆすり王の自業自得として犯人の貴婦人を見逃す。この貴婦人は後に王室の関係者と判明する。このような点は、ウーズビーが言うように、ホームズが騎士道精神の持ち主であることと理解することもできよう（217-227）。「黄色い顔」の結末を見ると、中産階級の裕福な商売人グラント・マンロー氏は、再婚した妻エフィと最初の黒人の夫との間にできた黒人娘を自分の娘として受け入れることで、騎士道精神が中産階級のリスベクタビリティの上に来る例を提供してくれる。それにしても階級社会で黒人

の子を自分の家族の一員にしたことで、商売が成り立っていただけるのであろうかという疑問がわいてくるが、このような結末にした Doyle には、大変な興味をそそられる。

このような独自の判断にしたがって動く人物に時代の読者が賛嘆の声をあげるのは、複数の批評家が言うように、伝記形式の流行にも反映している、時代の英雄崇拜の一種と捉えることもできるであろう (ウーズビー 199; Knight, *Form and Ideology* 80)。しかし、この英雄崇拜とは、別の言葉で言えば、単独者が可視性を独占し、自分独自の規格をおしつけて社会を動かしていくような人間を是とすることであるから、それは局所的にあらゆるところで、制度の内外を問わず働いている 19 世紀近代の規律＝訓練的な権力に対する反抗を示唆していると言えまいか。その意味で、ホームズの反社会的なボヘミアニズムは、規律＝訓練のテクノロジーの実践である自身の探偵行為の中に潜む他者、不安定要因であると言えまいか。特にホームズの知力が悪に用いられると困ったことになるのと言及が見られるので、これは一筋縄ではいかない不安定要因となろう。このホームズの逸脱的気質の問題は時代のデカダンスや退化の問題とも関わるので¹⁶、稿を別にしてまたいつか論じることとしたい。

結語 生＝権力とホームズ

我々は、中産階級のイデオロギーの護り手としてのホームズを眺めてきた。彼は、中産階級が大切にす神聖な家庭とリスペクタビリティと私有財産を守るのであるが、その際にフーコーのいう規律＝訓練のテクノロジーを駆使したのであった。規格化と可視性によって社会の秩序を脅かす恐れのある者は、ホームズの前にその正体を暴露されたのである。また場合によっては、わざわざ過去の罪をあたかもホームズが司祭であるかのごとくに、告白しに来る者さえあるのであった。この規律＝訓練のテクノロジーと告白という自己のテクノロジーは、「生＝権力」の二つの構成要素である (ラビノー & ドレイファス 203)。「生＝権力」とはフーコーが用いた概念で、西洋世界では、古典主義時代以降に登場し、19 世紀を経て、現代にまで続くとする、生命に対して特別な関心を寄せる権力のことである (『性の歴史 I』 第五章)¹⁷。それまでの君主＝主

権者の時代には、君主は臣下の死を要求する権利を有していて、格別に生命尊重の姿勢を示してはいなかったのであるが、「生＝権力」の時代になって、「生命に対して積極的に働きかける権力、生命を経営・管理し、増大させ、増殖させ、生命に対して厳密な管理統制と全体的な調整とを及ぼそうと企てる権力」(『性の歴史 I』 173) が登場する。民衆の福祉や健康もこの権力の目標となりうる。逆に国民の生命を守るという口実のもとに行う戦争もこの権力の発動になる。警察権力もこのような「生＝権力」の一翼を担っているものと考えることができる。ということは、中産階級の守護者であるホームズも、告白と規律＝訓練という二つのテクノロジーを駆使しながら、実は、この「生＝権力」という近代の大きな枠組みの中で機能していたと言えるのだ。世界中で読みつがれているホームズの探偵物語、その人気は我々が、自分を告白して解釈してもらうことで安心する管理社会、「生＝権力」の社会にどっぷりと浸かっているからかもしれない。

* 本論文は、日本英文学会九州支部第 59 回大会 (於：西南学院大) のシンポジウム「世紀末・モダニズム文学と支配」において、「ホームズに見られる近代の監視・管理社会」というタイトルで発表したものをもとにしている。

注

¹ ナイトのホームズ論は、『ホームズの冒険』に絞って集中的に分析したものである。この論は中産階級イデオロギーの働きを見るのに、物語のタイトル、主人公ホームズの造型、プロット、基本的な物語構造、犯罪と犯罪者、解決法、セティング等さまざまな内容・形式の観点から包括的な分析をおこなっている大変有益な基本文献の一つである (*Form and Ideology* 67-106)。

² トンプソンはまた、ホームズの人気があったことのさらなる理由として、ヴィクトリア朝がセンセーショナルな犯罪を好み、センセーショナルな文学という Doyle が利用できる形式が存在していたことをあげている (62-64)。

³ 90 年代の自転車熱、特に女性におよぼした影響については、清水一嘉の本を参照 (清水 241-66)。

⁴ 当時の紳士が、現実に落ちぶれてしまう可能性は、投資の失敗等によって考えられる

ことであったと、Jaffeは指摘する(97)。Jaffeの論文は、モノを作り出す類の労働とは縁のない専門職(シティの金融投資家、ジャーナリスト、探偵など)の紳士階級と乞食が意外に接近していて、外見さえ装えば、乞食は紳士に、紳士は乞食に内面の変化を伴わずに成り変わりうる劇場型世界が成立していると言う。これは社会的アイデンティティが簡単に操作可能であることを意味するから、アイデンティティとは何かの問題を提起し、人々に不安をもたらすという。そのアイデンティティの不安を象徴するのが、この短編で詳細に描かれる、労働とは無縁の阿片窟であるとする。

⁵ 非ヨーロッパ世界が犯罪の供給源として描かれ、ホームズはヨーロッパが非ヨーロッパ世界に対して持つ浄化力を象徴したものであるとする興味深い論点を正木恒夫氏は提示している。(219-236)

⁶ トンプソンは、『四つの署名』にみられるオリエンタリズムを詳細に分析している(69-75)。

⁷ イギリス人の典型から逸脱している人物が犯罪者として描かれていることが多いということ、つまり人種・民族がアングロ・サクソンではない犯罪者が多いという点については、Jannを参照(692-3)。

⁸ ホームズの推理法についての詳細な分析については、シービオクを参照。また、ナイトはホームズの人気を支えたのが、科学的合理主義の賛美だけではなく、それを人間味のあるものにした個人主義、つまり超然とし、傲慢で奇矯なボヘミアンであるホームズの個性でもあると言う("Case of the Great Detective" 368-70)。

⁹ ミクロの世界とホームズの関係については、高山宏『特殊講義』、57-68ページを参照。

¹⁰ 作者がエジンバラ大学の医学生時代に、先生であったジョゼフ・ベル博士の推論法にホームズの推理法が由来するという事はよく知られた事実である。『わが思い出と冒険』の第三章「学生生活の思い出」を参照のこと。

¹¹ 19世紀に都市化の進行する中で、観相術や骨相術等の疑似科学が発達したのは、都市の見知らぬ者どうしが相手の外見から何とかして性格等の内面を読み取り安心感を得ようとしたためであるというのが、ウェクスラーの本の根底にある考え方である。また、ホームズの短編「最後の問題」ではモリアーティ教授が、ベーカー街221Bまでわざわざ向いてホームズを脅そうとした際にホームズの額が思ったよりも低いことに、骨相学的な観点から驚いている場面がある。また、ホームズ物語の中に見られるさまざまなレベルの読む行為については、高山宏の『テキスト世紀末』、特に第8章、9章を参照のこと。さらに、Jannの論文は、観相学、骨相学、パソノミー(感情表出研究学)が、ホームズが人物を読み解く際のコードとして、いかに用いられているか、いかにそれらが階級、ジェンダー、エスニシティと関係するかを探ったものである。不穏な非合理的・無意識的な力の脅威にさらされている社会は、これらのコードにより、その成員の行動を予測可能なものとし、その成員を理解可能なリアリズム的な自己とすることができるので、中産階級の読者は安心を覚えたことであろうと、ホームズの正典の持つイデオロギー的働きについて述べている。時代は切り裂きジャックを

生み出した、恐ろしい時代社会であったことを我々はここで思い出すべきであろう。

¹² フーコーは、『自己のテクノロジー』において、<テクノロジー>の四つの主要な型、すなわち生産のテクノロジー、記号体系のテクノロジー、権力のテクノロジー、自己のテクノロジーが存在すると言う。この最後の自己のテクノロジーのおかげで、「個々の人間は自分自身の手段を用いたり他人の助けを借りたりすることによって、自分自身の身体および魂、思考、行為、存在方法に働きかけることができるのであり、そのねらいは、幸福とか純潔とか知恵とか完全無欠とか不死とかのなんらかの状態に達するために自分自身を変えることである」(19)。

¹³ ナイトは、ホームズの短編物語の基本的パターンは、"relation, investigation and resolution of mysterious events" (*Form and Ideology* 75) であると述べている。

¹⁴ ウーズビーもホームズのこの聖職者的な役割に注目している(227-8)。

¹⁵ Jannは、ホームズが公的な法律が認める以上の高度な正義の法にしたがっていると言う(703)。ホームズが、警察をある程度尊重しつつも、誰にも拘束されず、自分の判断のおもむくままに独自の立場で調べる姿勢を取っている点については、『恐怖の谷』を参照(52-53)。

¹⁶ デカダンスについては、ウーズビーの210-12ページを参照。

¹⁷ この「生=権力」についての明解な説明は、ドレイファス&ラビノーの第6章と8章を参照のこと。

引用文献リスト

- Belsey, Catherine. *Critical Practice*. 2nd ed. London: Routledge, 2002.
- David, Deidre, ed. *The Cambridge Companion to the Victorian Novel*. Cambridge, Cambridge UP, 2001.
- Doyle, Conan. *The Adventures of Sherlock Holmes*. Oxford: OUP, 1994.
- . *The Casebook of Sherlock Holmes*. London: Penguin, 1951.
- . *The Hound of the Baskervilles*. London: Penguin, 2001.
- . *His Last Bow*. Oxford: OUP, 1994.
- . *The Memoirs of Sherlock Holmes*. Oxford: OUP, 1994.
- . *The Return of Sherlock Holmes*. London: Penguin, 1981.
- . *The Sign of Four*. London: Penguin, 2001.
- . *A Study in Scarlet*. Oxford: OUP, 1994.
- . *The Valley of Fear and Selected Cases*. London: Penguin, 2001.
- Hennessy, Rosemary and Rajeswari Mohan. "'The Speckled Band': The Construction of Woman in a Popular Text of Empire." Hodgson, 389-401.
- Hodgson, John A. ed. *Sherlock Holmes: The Major Stories with Contemporary*

Abstract

Sherlock Holmes and Society of Surveillance and Discipline
---A Foucauldian Reading---

Yukio KANEKO

The Ideological function of Holmes stories has often been mentioned as they helped protect the Victorian middle class values such as respectability and property, and brought under control any chaotic atmosphere and troubling anxiety in society. Thus they gave the middle class reader a reassuring image of society. Holmes with individualistic rationality was the foremost guardian of this middle-class dominating society detecting and containing whatever crimes are threatening to this society. On the other hand, earlier than Holmes, Dickens is said to be the first novelist to depict the disciplinary society as explicated by Foucault. We can safely say that one generation later, Holmes was still living in the surveilling and disciplinary society and that Foucault's insight into modern society is applicable to the late Victorian society. The purpose of this article is to rewrite the ideological reading of the Holmes stories with the use of Foucauldian concepts and to bring a somewhat new light onto the reading of them with Foucault as reliable guide.

We have adopted as an effective analytic tool two Foucauldian concepts, normalization and visibility; both of them are of the technology of discipline. The former is to correct the individual bodies who commit a transgression against the law and discipline and to turn them into the docile bodies while the latter is to survey the individuals in whatever form, for example, the administrative dossier.

Normalization in the Holmes stories works to secure respectability and property, two central middle class values. We have examined this point, mainly analyzing three short stories, "The Scandal in Bohemia," "The Man with the Twisted Lip," and "The Speckled Band," in terms of gender, class, and the British Empire respectively. In terms of gender, most of the docile women in the stories are English middle-class and they are what is called "the angels in the house". By contrast most women active and intelligent and thus threatening to the male-dominating society are foreigners, with Irene Adler as a typical figure in this regard. Thus the threat comes from outside not from within. Class struggles are not either overtly or politically inscribed in the Holmes texts but a suggestion of anxiety accompanying class mobility is seen in "The Man with the Twisted Lip." The British Empire, together with some of the other non-British nations, is almost a hotbed of evil. The colonial natives coming to Britain and the British colonizers returning home, in committing crimes, are disturbing elements to the society. We have identified here a condition of Orientalism. In almost all the crimes related to these three types,

- Critical Essays*. Boston: Bedford/St.Martin's, 1994.
- Jaffe, Audrey. "Detecting the Beggar: Arthur Conan Doyle, Henry Mayhew, and "The Man with the Twisted Lip" *Representations* 31 (1990):96-117.
- Jann, Rosemary. "Sherlock Holmes Codes the Social Body." *ELH* 57 (1990):685-708.
- Kayman, Martin A. "The Short Story from Poe to Chesterton." Priestman, 41-58.
- Knight, Stephen. "The Case of the Great Detective." Hodgson, 368-80.
- . *Crime Fiction 1800-2000: Detection, Death, Diversity*. London: Palgrave, 2004.
- . *Form and Ideology in Crime Fiction*. Bloomington: Indiana UP, 1980.
- Miller, D.A. *The Novel and the Police*. Berkeley: University of California Press, 1988.
- Priestman, Martin. *The Cambridge Companion to Crime Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Thomas, Ronald R. "Detection in the Victorian Novel." David, 169-191.
- Thompson, Jon. *Fiction, Crime, and Empire: Clues to Modernity and Postmodernism*. Urbana: University of Illinois Press, 1993.
- ウェクスラー, ジュディス『人間喜劇 19世紀パリの観相術とカリカチュア』ありな書房, 1987。
- ウーズビー, イアン『天の獵犬 ゴドウィンからドイルに至るイギリス小説のなかの探偵』東京図書, 1991。
- シービオク, T.A. & J.ユミカー=シービオク『シャーロック・ホームズの記号論』岩波書店, 1994。
- 清水一嘉『自転車に乗る漱石——百年前のロンドン』朝日新聞社, 2001。
- 高山宏『テキスト世紀末』ポラ文化研究所, 1992。
- . 『殺す・集める・読む 推理小説特殊講義』東京創元社, 2002。
- ドイル, コナン『わが思い出と冒険 コナン・ドイル自伝』新潮文庫, 新潮社, 1965。
- ドレイファス, ヒューバート・L&ポール・ラビノウ『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房, 1996。
- 富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』青土社, 1993。
- フーコー, ミシェル『監獄の誕生』新潮社, 1977。
- . 『自己のテクノロジー フーコー・セミナーの記録』岩波現代文庫, 岩波書店, 2004。
- . 『性の歴史I 知への意志』新潮社, 1986。
- . 「主体と権力」, ドレイファス&ラビノウに所収, 287-307。
- 正木恒夫『植民地幻想 イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房, 1995。

Holmes suppresses the chaotic movements with admirable finesse.

Visibility, another component of the technology of discipline, works to survey disturbing evildoers. For Holmes the means to secure visibility is manifold: from his reasoning based on scientific rationalism, his use of various kinds of dossiers, his informants, to his marvellous disguise. Confession, increasingly important in the history of western thought, is also worth considering as the technique of discipline. Those who make a confession reveal their innermost selves practicing the technology of the self, and those who listen to them keep them in constant visibility. As the stories of Holmes consist of the narrative confessions of clients and criminals, we have examined "the Veiled Lodger," a unique story composed wholly of the criminal's confession, and seen that though not a portion of detective investigation is conducted Holmes is securing visibility in the form of confession, a productive mode of truth, and can be called, as it were, a priest.

Lastly, we have analyzed the relationships between Holmes and the police/law. The private detective stands on the periphery of the middle class society when he, a bachelor, sometimes behaves in an eccentric fashion but this allows him freedom to move anywhere within the society regardless of class and to show respect for the privacy of the upper- and middle-class people, which the official police cannot do. Furthermore, at times Holmes establishes himself above the official authority of the police: the detective, a few times a lawbreaker himself, gives sanction to private revenge, and allows criminals to escape arrest if they are justifiable enough. This attitude of Holmes is an unstable factor in the society of surveillance and discipline, which topic I will put aside for later investigation.

Foucault asserts that "bio-power" emerges in the age of Classicism and continues to work through the centuries till today. It is a power to exert a positive influence on life, with administrative measures taken to subject it to precise control and regulation. Holmes is part of this bio-power as a practitioner of discipline (normalization and visibility). This may explain his never-fading world-wide popularity today.